

北斗病院新院長 新田一美氏(64)に聞く

「十勝医療の基礎固める」

北斗病院(帯広市稲田町)の院長に、前北斗クリニック院長の新田一美氏(64)が就任した。「他医療機関と密接な関係を保ち、土台である十勝の医療の基礎を固め、皆さんに納得していただける医療を提供したい」などと抱負を語る新田院長に、かじ取りへの考えなどを聞いた。

(聞き手・松岡秀宜)



「患者さんの健康を守ることを基本姿勢とし、十勝医療圏の中で役割を果たしたい」などと話す新田院長

につか・かずみ 1985年防衛医大卒。防衛医科大学校病院などで勤め、2006年5月から北斗病院に勤務。北斗クリニック院長などを経て、今年4月から現職。専門は脳神経外科。日本脳神経外科学会指導医・専門医。日本脳卒中学会専門医。

「2次救急を基本」踏襲

「院長就任から1カ月余り、改めて抱負を。」

新田院長 前院長の方針を踏襲した上で、2次救急を基本とした医療を時代に合わせ提供したい。他の医療機関と密接な関係を持ち、十勝の医療の基礎を固め、地域の皆さんに納得していただく医療を提供したい。

おり、大災害への準備と対応できる体制は必須。令和となり、コロナ禍を経て、医療も激変しているが、患者さんの健康を守る基本姿勢については変わっていない。

感染症対策向上

「新型コロナウイルス対応の振り返り、現状と再流行に備えた対応は。」

1952年発生の上勝沖地震からは50年以上も経過して

り、現状と再流行に備えた対応は。

新田院長 院内での大規模な集団感染が無い限りは、対応できる体制となった。感染症対策は、この数年の経験を教訓にし、その経験が対応する上での財産にもなっている。現在、コロナ患者の入院は一般病棟での個室対応。入院する患者へのPCR検査や面会制限は続いている。

感染を乗り越え、平時に戻りつつあるが、再度の(他の感染症も含む)新たな大規模集団感染も予想される。コロナの経験も踏まえていろいろな状況を予想しつつ、十分な対策を考えておく必要もある。「医師の働き方改革」が本格的に始まった。

新田院長 宿日直体制や休暇の取り扱いなどは、1年ほど前から準備を進めており、

混乱はない。医師が記入していた書類について、コメントカル(医療従事者)が行うワークシェアリング(仕事の分かち合い)を行ったり、医療行為の一部を医師以外の職種が担うタスクシフト(業務の移管)に取り組んだり、効率化を図りながらチーム一丸で対応している。2次救急なども、これまで通り。地域の皆さまには安心していただければと思う。

内科強化が課題

「地域の皆さんに伝えたいことは。」

新田院長 脳神経外科と整形外科は最新の医療をと、十勝医療圏の2次救急を担うために必要な体制を敷いている。地域の皆さまからは内科などの診療科目を強くしてほしいとの声もあり、今後の課題。法人内には、クリニックやリハビリテーションセンターなどもある。密接な医療連携を保つことで、患者さんの健康を守ることを基本姿勢とし、十勝医療圏の中で、しっかりと役割を果たしたい。